

PHD LETTER

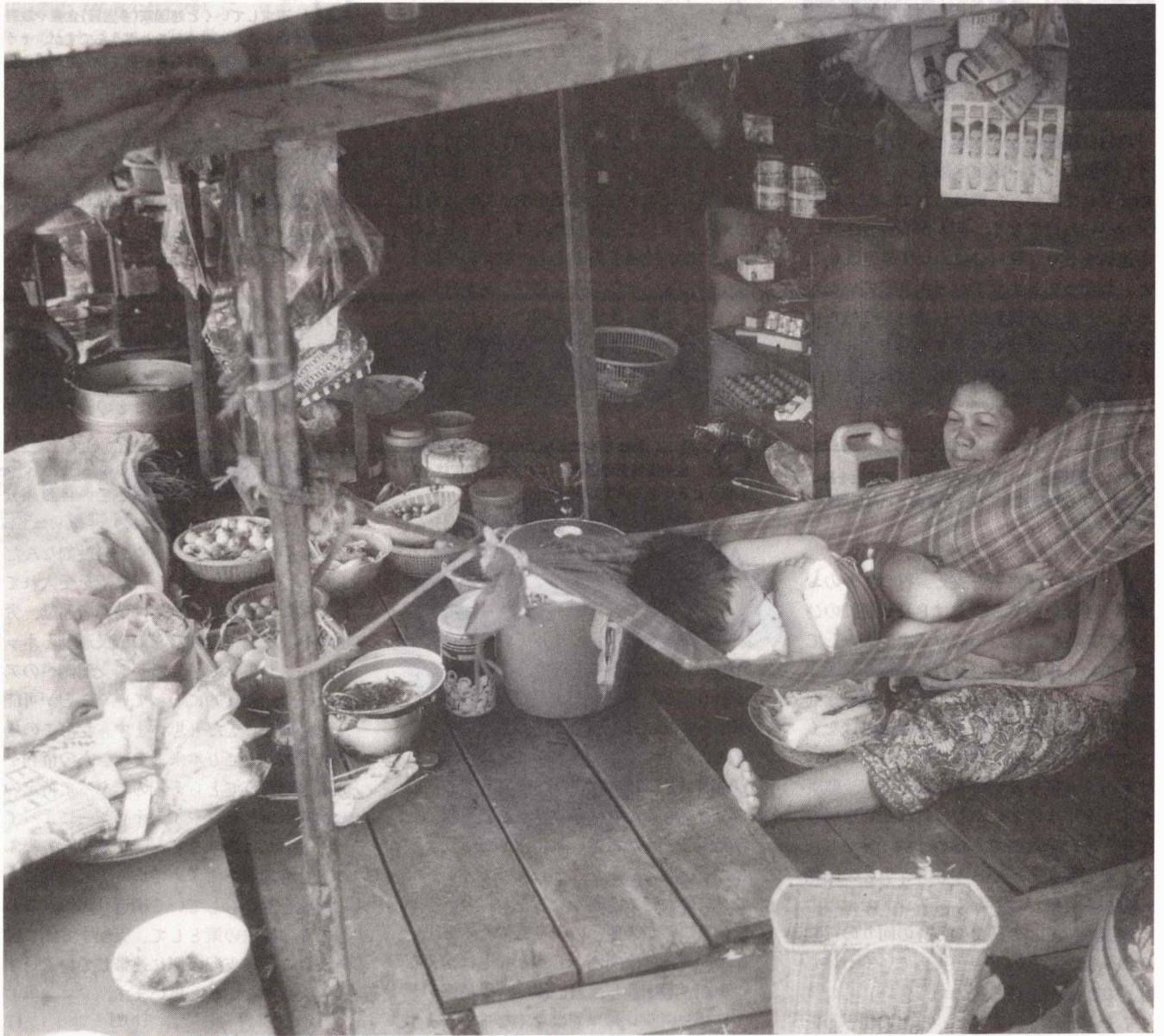
<25>

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1987・12

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202 TEL(078)351-4892
郵便振替:神戸1-29688財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価:100円
レイアウト:エフアンドエフ

- こちら編集部——そこが知りたいPHD運動——……………P2~P3
- “異文化とのダイアログの旅を”民際フォーラム'87レポート……………P7



昼下り/タイ、バンコク クロントイ

町のハズレの一角を訪ねた。
 建てこんだ粗末な家並の間にも明るい表情があった。
 洗たくをする少女、昼寝をする子供、晩の支度をする婦人。
 昼下りの景色にはふさわしい配役に、時折り働き盛りの男の姿が見える。
 この人たちも農村からでてきたのだろう。

こちら編集部 そこの知りたい PHD運動

「PHD運動をもう一度とら直してみよう」今回のレター編集会議でメンバーから期せずしてあがった声はこれでした。早速メンバーだけでなく、何人かの会員の方にも連絡をとり、PHDについてきたいことも、わかってるようでフツキリしていなかったことなどを編集部から指名をうけた数名が皆さんの質問を代弁する形で2日にわたり草地総主事、藤野主事、増岡主事に伺ってみました。

Q 編集部：（以下編とする）研修生を招いて技術を覚えてもらう事業がPHD運動なんでしょうか。

A 草地：研修生を支え、村づくりのお手伝いをするのはPHD運動のひとつの過程であり、一部分です。人として生きていく権利を満たされた平和で健康な生活は、アジアでも日本の中でも大切なものですがそれをただ待っているのではなくて、つくっていかねばならないわけです。つまり担う人が育ち平和づくり、健康づくりをすすめていかねばならないのです。それを実現するためには「分かち合い」が必要であって日本とアジアとの関係の分かち合いだけでなく、アジアの村の中、日本国内、そして私たちの身の回りの行動の積み重ねがその実現を支えていくわけです。ただし、漠然と「分かち合い」といってもピンとこないでしょ。現実問題として私たちは、とりえず衣食住がまあ満足されているけれど一方のアジアの村では食事をとれなかったり、病気が多かったりです。このきわめてはっきりした差という問題に注目して研修生を招くことからアジアや南太平洋にある困難な状況を、草の根による村づくりへのお手伝いという具体的な事業にしていくんで、このことによって分かち合いを理解し、実践していただいそれを他の分野に、対象にあてはめて、どこまでいってPHDの全体像になり「ともに生きる」ということなんだと思ってます。



Q 編：ではその研修事業は、何故アジア・南太平洋地域を対象としているのですか。他にもアフリカなども困っていると思いませんか。

A 草地：レターのここ（1頁の右上の部分）を指して）にもあるようにPHD運動は世界を対象に考えていますが、それを実現していくひとつの過程としての研修事業であり、この小さな団体、限られた予算の中でいきなり世界を相手にはできないです。そこで、まずアジア・南太平洋地域を対象とした事業をやっているわけです。どうしてもと言われれば、もっとも私たちに近い地域であること、我々の生活と歴史的にも、また、今も結びつきが強いこと、とくに第二次世界大戦のときに大変な迷惑をかけたところとしてその戦争責任を負う意味も大事だと思えます。

Q 編：いわゆる援助・協力が、日本の自己満足や優越感の裏返しにすぎないのでは、とも思うときがあるんですか。

A 草地：私たちが十分、余っているから、あげます的な発想、「かわいそう」でもそれは自分とかわりはないんです」という考えにとどまっているなら、一時的なものに終わってしまう、今言われたことそのままだと思います。でも、きっかけがそうであったとして、次の段階にアジアをはじめとする第三世界の人々が困っている原因がどこにあるんだらう、そこに人為的な力があるんじゃないか、そして自分との関係はどうなっているだろうというようなことを考えていくことによって、例えば、アジアの人たちとどういったお付き合いをしていくことが必要なのかみてくると思えます。「自分は関係あらへん」とは言えなくなるでしょうし、自己満足や優越感がどうしたというレベルではなくなってきます。今の自分の生き方が回りの人、国内、アジア、そして世界にどう関係していくかを考えたときに、自分だけの利益で動くことの怖さ、傲慢さが、そしてそれ作り出す構造がみえてくる、先程もいった「分かち合い」というのは、いつもある一方から流れるのではなくて、ある時ある場面ではその「分かち合い」方向が変わる。だからこそ「分かち合い」なわけです。PHDの活動のなかで研修生をむかえる機会をつくるのは、日本の人たちからの方向ですが、研修生と出会うアジアの生活の話を聞いた

り、日本の生活についての意見を聞く、また、アジアの村を訪れてみることによって得られるものは我々が受手になりますよね。日本は確かにカネとモノはあるかもしれないが、それで自分の力だけで得たものでもないし、カネとモノがあるという以外のところで果して他の国の人たちに勝っているところがあるんでしょうか。PHDは私たち自身が学び、かわっていくための運動ともいえます。

Q 編：アジアの多くの人たちの貧困の原因を追求していくと超国家(多国籍)企業や政府のやっていることに基づくかと思うんですが、そういうところには直接はたからかいていく方が研修生を呼ぶよりも効果があるのではいでしょうか。

A 草地：たしかに今の第三世界の貧困の要因に開発独裁政権、アグリビジネス(農業関連産業)等の存在や日本の政府、企業のあり方があると思います。今はPHDの中で正面からとりくんではいまどきそうといった行動をとる場合には、それなりの質的、量的なエネルギーが必要で今今のPHDの中にそれだけのものがあるとはまだ思いません。むしろその支配する側に訴えていくこの一方で必要な支配されている側の人たち、いかにえれば本来あるべき人権を侵されている人たちが自らの力で少しずつ克服している部分もあると思うそのひとつのきっかけづくりをお手伝いすることがウチの役割なんだと思っています。ただ、研修生を受入れていく動きとともに、例えば消費者運動、労働運動、反公害運動などの市民運動とネットワークしていくところから支配側へのアプローチを間接的につけていくことが可能だし必要なことだと思います。ただこの場合でもあくまでも本来あるべき人の権利を守るという点でとらえるのであって特定の政治的ポジションやイデオロギーによって動くものではありません。善意から一歩ふみだして理解をすすめていくと必然的にその事態をもたしている構造にぶつかってその解決の策として、支配する側に働きかける、被支配の側に連帯していくいずれも大事やないかと思えます。

Q 編：帰国した研修生へのフォローアップはどのような視点で行っているのですか。

A 増岡：帰った研修生に対しては助言することはできても強制するだけの絶対的な自信もありません。なんといっても彼らの地域のこととは彼らが一番知っています、彼らが決めてやっていきます。研修事業を通じて、最終的に自立した村づくりがすすむことを願ってやっていますが、私たちが支援できることはそのリーダーを育てることなんです。緊急援助の場合とは違

って、私たちは困っているからということでお金や物そのものによる支援はしません。与えることによる効果より依存を助長させたり、逆に与えられた人々がその地域で浮いてしまうようなことの方がこわいんですから。与えられるだけ、教えられるだけという受身では、一時は良くも、また同じような困難や課題がおこったときに解決していくことはできないと思います。お金や物が必要なら、どうやって自分たちで手に入れるかを研修生を中心に村の人たちが考え、行動する方向にしていってほしいです。

Q 編：となると具体的に日本からのフォローアップは、どんな形をとるのでしょうか。

A 増岡：日本で指導して下さった方々やホストファミリーの方々が研修生の村を訪れ、現地の状況を見、研修生たちと語り合い、助言や励ましをしていただくといった、人が介在したフォローアップを中心としています。今年は、8月にインドネシアに漁業の指導に行ってくださいましたし、12月・1月にはタイに保健関係の方、ネパールに編物・洋裁の先生方に行ってください予定です。技術の指導だけでなく、はるばる日本から来てくれるということが、研修生はじめ村の人々の「やろう」という意欲を高めることにもなっているようすです。また、手紙のやりとりで研修生のリクエストによって参考資料を送ったり、彼らからの疑問・質問に答えたりすることなどを行っています。

Q 編：つまり村づくりそのものは村の人たちの手ですすめるわけですね。

A 増岡：日本とはちがった条件があっても、それを理由にするのではなくて、自分たちなりの方法を考えて取組んでいる研修生がいることは嬉しです。傘の骨を編物の編棒として利用したり、灌漑用水路を作るための材料を手に入れるために、村人から毎月少しずつお金を集めて積み立てているという例もあります。自分たちの力で出来たということが大きな自信となるようですね。また、研修生どうしが集まって経験の分かち合いをすることが活発になれば、いろいろなアイデアも生まれてくるでしょう。ネパールの場合、帰国研修生は8人いて、帰った地域からバラバラなので平生はお互いの協力がしにくいですが、たとえばある村の婦人が編物技術を身につけたために、別の地域で頑張っている研修生のもとに学びに行かされた、というような一人のリーダーだけではできないことをヨコの関係をうまく活用してすすめてみては、といったような助言もしています。日本の私たちがいつもあてにするのではなく、自

分たちで考えてやってみる、ということが大切に思います。



Q 編：帰国した研修生はみんな順調にいきますか。

A 増岡：これまでのレターの中で個々の状況はその都度お伝えしていますがある程度、帰国の際の抱負に近い成果をだしている人もいますし、「一生懸命頑張っても、なかなか効果があらわれない」とあせっている人もいます。私たちは、10年、20年といった長い見通しの中で村が変わっていくことの中に日本での経験のいくつかが役にたってくればと考えていますが、彼らにしてみればやはり早く目にみえる結果が欲しいので、彼らの意欲がとぎれないように私たちが応援していかなければと思います。手紙だけでも彼らにとっては、大きな支えになるだろうし。特に厳しい状況にあるのはフィリピンの人たちです。国の政治経済が不安定な中で研修生が生きるベースである家庭の経済的困難などに直面し、まず自分自身の経済的自立に取り組んでいる人もいます。ですから皆様へ、具体的な成果をお伝えしたいのはやまやまなのですが、今申し上げたような状況をご理解いただきたいと思います。



Q 編：全国から集まる会費・寄附などは、どのように使われているのですか。

A 藤野：ここ2-3年は会費・寄附に雑収入を含めて3千万円位の収入になりますが、のうち2千万円弱が研修事業にあてられ、残りを啓発事業に6割、事務所運営に4割ぐらいの配分になります。4名の職員の給与はこれは別に基本財産

の利子でまかっています。

Q 編：研修生1人1人への位費用がかかるんですか。

A 藤野：だいたい1年間の日本の研修には3百万円が平均的なものです。これは招へいにあたっての調査・調整費、復讐の渡航費、国内交通費、食費、滞在費、研修材料費、授業料、保険医療手当などの直接経費とその研修生ケアに伴って発生する費用が含まれます。またフォローアップには1人1年というはあてはめにくいのですが4年間で1人平均2百万円、合計で5百万円程になります。

Q 編：ここ最近の寄附や会費の入りはいかがですか。

A 藤野：残念ながら来てはなりません。ウチに限らずこの種の運動にありがちなスタートして2-3年のブームの勢いが消え、先程説明したような3千万円程の収入の維持に苦労しています。そうはいってもPHDのような地道な民間の運動に対して7年間も継続的な支援をいただき、また、1億8千万円の基本財産にまでなったことは、まねなことであると思えます。感謝の気持ちでいっぱいです。収入が減ったからといってこれまでも継続してきた研修事業の規模をおいそれと縮小するわけにもいかないし、研修生にかかる経費以外をできるだけきりつめて運営しています。例えば、広報なども最小限の経費で最大級の効果になるよう考え、またボランティアとしてかわって下さる方々のご協力をいただいで懸命にやっているわけです。今年度も半期がすぎましたか収入予算に対し1/3程度の達成にとどまっています。すでにPHDをご存知の方には継続したご支援にあわせてお一人お一人のまわりの方々への運動参加への呼びかけを是非お願いしたいと思います。

先程も申し上げたようにPHDをお伝えする広報も郵送料がバカになりません。協会による新規開拓の努力は当然ですが全国にPHDを支えて下さっている6500名程の方々それぞれがお一人ずつ呼びかけていただけたらこそ最良最大の効果になると思います。あんまり金、金と言いたくない、金を集めることがPHDではないのはいまでもないんですが、運動のめざすところをより多くの方に理解していただく方向でなんとか毎年5千万円位の収入を得て、研修生の数を増やして村づくりをすすめる人材を育てること、より多くの日本に住む人たちに研修生からの学びからアジア・南太平洋地域とともに日本の中にも平和と健康が満ちられるようPHD運動を広めていきたいと願っています。

研 修 生 レポ ー ト



韓国比較研修報告
アラム・ムルティム(24才)。インドネシア西スマラ出身。'87年3月に来日し、漁業を主に研修中。

ニーラニー・サマンタ・ジャヤコティ(25才)。スリランカのボヤワラーナ村出身。'87年2月に来日し、縫製・保健衛生を主に研修中。

韓国の研修で得たもの

コマさんは9月はじめから3週間日本の農業と韓国の農業の比較を行い、タイの彼の村での取り組みにヒントを得るため崔炳七(チェ・ビョンチル:韓国有機農業普及会会長)先生のお骨折で韓国の京畿道、忠清北道等の農村で研修を行いました。その時の様子を聞いてみました。

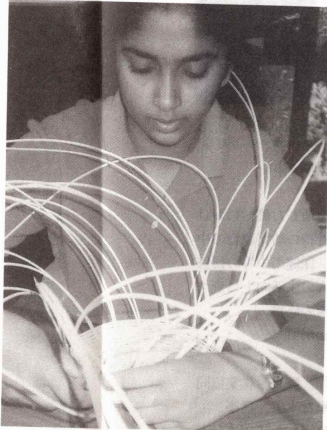
「韓国に行って農業のこと、村づくりのことを勉強しました。例えばミミズの養殖、堆肥や牛豚のエサの作り方等です。特にエサのことはお金のかからないのがいいです。自分の家にある木のクズやスカにバクテリアを入れて3日間発酵させます。ウサギやヤギも食べます。でも韓国も農業や化学肥料をたくさん使うことをはじめています。韓国の村の人には貧しいと思います。でも心いい人がたくさんいて、とても親切でした。私が会った人達は、日本のこと嫌いな人たくさんいます。とくに40才より上の人がそうです。その人達は子供達にもそのことを教えます。そして日本で作った時計やクルマも嫌いです。これは日本の会社がお金をもっていきからとっていました。韓国の人が日本のことを嫌いな人たくさん知って、私はびっくりしました。私は村の人に日本もいい人たくさんいますと話しましたが、あまりいい返事はなかったです。

私の泊った家は、朝8時から夕方5時まで働きました。日本ではもっと長く仕事したので、韓国の方が好きです。私が見た韓国の農業は機械も少し、お金も少いです。日本の農業は機械たくさん、お金もかかります。やがて韓国の農業も日本と同じになると思います。今は、タイの私の村と日本のまん中か韓国の農業だと思います。韓国では、日本ではもう昔になったことがまだあるので勉強になりました。たくさん友達ができたとかが一番よかったです。

彼の明るい性格が韓国でも評判が良かったようです。この韓国での研修を彼の学びだけにとどめず、私達と韓国の人達とのよい関係づくりにつなげたいと思います。インタビューのあと「今日はプロレス見ます。イノキ強いね」とテレビのスイッチを入れるコマさんでした。

記一袖岡信明

もうワンピースも作れます



兵庫県三木市にて縫製の実習

ニーラニーさんは現在、兵庫県上郡町の保健センターで研修中です。まず、センターの本村課長から彼女のカリキュラムの内容について伺いました。日本とスリランカでは国の事情かなり違うので日本のやり方をそのままちかえんでも役に立ちにくい、そこで応用のしやすい栄養・公衆衛生に重点をおくようになったそうです。また保健関係のことだけでは村の人たちが興味をもたないので、身につけば仕立代の節約になる洋服と組み合わせ、村の女性にアピールするプランをたて、今、夢中で洋服に取組んでいます。手作りと言えば日本でもめてはやされていますが、彼女の作った洋服、カバンは実に良くできていて、私も一緒に習いたいと思った程。

寒さに敏感なニーラニーさん、10月の頃から早々に冬布団をだしてもらったそうです。ここ最近報道される内戦状態には「いつもはじめに仕掛けるのはタムル人なのよ」と少しムキに訴えるシンハリ人の彼女、毎日英字新聞に目を通しています。仏教徒だから殺生はダメ。蚊に刺されても追い散らすだけ。野良犬が増えて、狂犬病が多くなりました。

今までスリランカといえば、朝のテレビででてくるウィッキーさんと紅茶しか思い浮かべた私が、無知、強気の質問攻めをしたにもかかわらず、美しい日本語で答えてくれたお疲れ様でした。

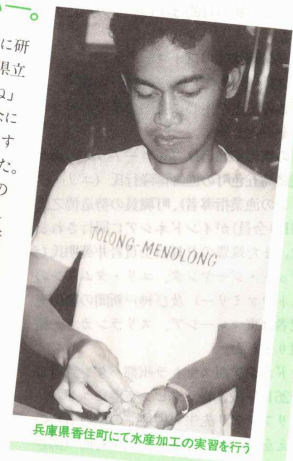
この小じんまりとした町で彼女の存在は大きく、まわりの皆さんに、ごく自然にアジアへの関心をききたす役割を果たしているように感じました。

記一佐々木久恵(学生)

アラム・ムルティム(24才)。インドネシア西スマラ出身。'87年3月に来日し、漁業を主に研修中。

模索の中での心の触れ合い

台風19号が、加古川から日本海へ抜けていく夜に研修生のアリさんを兵庫県香住町に訪ねた。兵庫県立香住高校の寮の一室でアリさんは、「少し寒いね」と笑いながら、せっせと日誌風のレポートと丹念に写真を貼りつけたおそらく帰ってからテキストにするのであろう魚の加工手順のレポートを書いていた。「村に居る時は、何故こんな事に気付かなかったのか」「私、村に帰って教えます。私だけのものにしてあげないね」と彼は熱心に語る。野菜でも魚でも、最新の技術や機械を援助すれば獲れる量は増える。しかる流通経路の未整備の問題である。私もこの問題に悩まされた。彼の村では魚の保存が大きな問題である。市場から家庭にまで冷蔵庫があるのが当り前の日本とは同じように考えられない。それゆえ、干物やねり製品の加工法が進めば、厳しい海でせっかく取った魚を捨ててしまうこともなかろう。「村の人々が喜んでくれる」とアリさんは今の実習を大変喜んでいた。久しぶりにインドネシア語(マレー語とはほぼ同じ)で話したためか写真を見ながら色々な話をうかがった。それぞれの立場から真剣に、アリさんとアリさんの村の人達に適切な技術を模索しておられ、又、何よりそのアリさんを見る温かい眼差しには頭が下がる。確かに日に五回のお祈りをするのに対して、もっと教えた側の方としてはとまどいを感じてしまうだろう。マレーシアの村の畑でクワをふるっている時に、木陰へ行ってお祈りされたのには腹が立った私ではあるが、今では結局、伝統の大切さと文化が違うと言っても人間同士、泣いたり笑ったり共通点の方が多いのが当然で、その事を素直に実感しているのはアリさんと共に生活している礼儀正しい寮の生徒さん達ではないだろうか。



兵庫県香住町にて水産加工の実習を行う

青年海外協力隊でマレーシアに農業改良普及員として派遣。'87年8月帰国。記一小澤裕之

	8月	9月	10月	11月	12月	'88年1月	2月	3月
アリさん(5期生) 漁具・漁法、加工	静岡県東茂郡和歌山東有田郡	神戸市	兵庫県香住町	兵庫県加西市 兵庫県栗田庄町	神戸市・明石市	西和歌山県 日本研修	研修整理	研修終了報告会(神戸)
アラム・ムルティム(5期生) 協同組合、産量、集魚	兵庫県香住町	兵庫県香住町	兵庫県香住町	兵庫県香住町	兵庫県香住町	兵庫県香住町	兵庫県香住町	兵庫県香住町
ニーラニーさん(5期生) 縫製、手芸・保健	兵庫県三木市	兵庫県三木市	兵庫県三木市	兵庫県三木市	兵庫県三木市	兵庫県三木市	兵庫県三木市	兵庫県三木市
ワラーヤさん(6期生)								
バドニさん(6期生) 幼児教育								
アジヤンタさん(6期生) 農業								
アファールさん(6期生) 農業								
来日								
日本語研修(神戸市)								

研修生スケジュール

草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

去る8月25日から9月19日までインドネシア、東マレーシア、スリランカを訪問しました。この旅の目的は次の二つの点にありました。

- ① 帰国研修生のフォローアップ
 - ② '88年度研修生(第六期生)の選考
- 以下この二点を中心に各国の草の根のレポートをいたします。

尚この旅の参加者はフォローアップの面から淡路島五色町の漁師柳隆行氏(ユリ・タムリンの漁業指導者)、町職員勢造博之氏(PHD会員)がインドネシアに同行されました。また筑豊のPHD会員岩井英明氏(ランジット・ジャヤンタ、ユリ・タムリンのホストファミリー)及び神戸新聞の慶山充夫記者は東マレーシア、スリランカも一緒に回りました。

インドネシア西スマトラ州都パダン到着は8月26日午後3時、タビン空港にユリ君、シャリフ・アリ先生(現地での協力者)の迎えを受け5ヶ月振りの兄弟対面(柳さんとユリ)は誠に感激的でありました。例によって州政府との接渉を終え地方の村へ入ることの確認を取りました。西スマトラの辺境の村に入るには形式的には何も要りませんが実質的には州政府やその下の郡、村当局の認知が必要です。一般の旅行のような訳にはいきません。第一にユリ君の案内で彼の指導現場及び関係の所を訪ねました。帰国後5ヶ月、柳さんから教わった網の技術を一生懸命漁師に伝えようとしています。彼の上司ムグニ氏との会見によればユリはほとんどオフィスにいない。帰国



日本の漁具はここに置りつくとどのやかのパシバルの漁師と話す淡路の漁師 柳さん

後ずっと西スマトラの漁村を回りある時は船で寝、ある時は極貧の漁村で寝泊りをして非常に熱心に漁師の人々に仕えているとのことでした。その証拠に彼の顔は見事な潮焼けで黒光りがしていました。第二に現在の研修生アリ・ムルティム君の村パシバルを訪ねました。両親は我々を大歓迎して下さいました。村の最大の課題は何といっ

ても漁獲高を上げることと魚を加工してより高く売ることです。柳さんと村の漁師の間に極めて具体的なディスカッションが行なわれました。漁法、漁具、加工法等々。それは迫力に満ちたそして具体的な交流でした。船酔いに苦しむアリ君の残された半年間の日本での研修課題もこの交流から明らかになります。



アリ君のレポートを読む両親と村人たちパシバル アリ君の実家にて

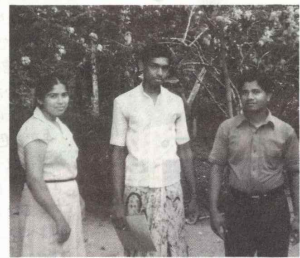
らかにになりました。加工技術等の研修です。第三に来年度の研修生選考の地アイルバングス村を訪ねました。州都パダンから260km、車で6時間半の道のりです。三年目に入るPHDの働きに対し、州政府は理解と協力をもって応えて下さり、我々の願いである本当の草の根の漁師を今年こそ選びたいという願望はやつとかなえられました。シャリフ・アリ先生の口添えで副知事が研修生選考については最大限PHDのやり方でやれるよう村長に手紙を書いて下さいました。



'88年度研修生アファンル君(中央)と仲間達淡路の漁師 柳さんの顔も見える

に母を亡くし父は他の女性と再婚。若い伯母夫婦と同居し、かなり苦勞しながら地方の村では珍しく高校まで卒業したなかなかの頑張り屋の青年です。日本での研修希望科目は第一に漁業協同組合、第二に漁法、漁具ということです。彼の村アイルバングスは西スマトラでは珍しく漁業協同組合が盛んです。人口1万5千人、その約1割弱の1400人が漁師。そして彼の住む地区の300人の漁師の内141人が組合に加入していると

いうことです。彼が成功してくれば続けてこの村から数年間研修生を招きたいとユリ君と話し合いました。今回のスマトラ訪問で得た感触は①フォローアップは人を送り具体的な課題(漁業とか農業)を中心に交流すること。②帰国した研修生を軸に少なくとも数名の研修生を招き一定地域の中でネットワークを作ること。③送り出し地域の指導者と良い関係を作ること、が具体化しそうであるということでした。9月6日から11日まで東マレーシアを訪問し12日から17日までスリランカを訪ねました。紙数の関係でその具体的な報告は次回にしスリランカ次期研修生のプロフィールだけ紹介します。



「がんばれよ」と第4期研修生ランジット・ジャヤンタさん(右)から励ましを受ける第5期生のアヤンタ・プレマラルさん(中央)とバドミニ・ラージャバクシャさん

氏名: Padmini Rajapaksha
年齢: 23才(女)
研修内容: 幼児教育を通じた農村における家庭改善特に幼児教育の中での栄養、保健衛生等の研修および婦人の生活向上に資する洋裁技術の修得。

氏名: Ajantha Premalal
年齢: 20才(男)
研修内容: 畜産、稲作、野菜、農業協同組合、簡単な木工、建築。

6月に短期研修を終え帰国したアビクーン村長はランジット君(6月帰国)を中心に今年のニールニーさんそして上記の2名でボヤワラナ村に4人のチームを作り4~5年がかりで若者による組合活動を形成したいと考えています。そのために息の長い計画を作りたいと云っていました。じっくり我々も交流する予定です。(続く)

草 地 賢 一

※この海外出張は10月8日から神戸新聞に「南の島の隣人達スマトラ、スリランカ、1万3000キロの旅」と題して約30回にわたる連載ドキュメントになりました。ご希望の会員の方には送料実費でコピーをお送りします。PHD事務所までご請求下さい。

“異文化とのダイアログの旅を”

国際フォーラム'87レポート

10月3日、国際フォーラム'87「アジアの旅を考える」が大阪国際交流センターで開催され、PHD協会も実行委員として参加した。

「私は1人の日本人旅行者が歩いているのを見た」これは、クントン・インタラタイ氏(京都精華大教授)によると、タイの嘘つき大会で優勝した嘘だそうで、日本人にとっては笑えない冗談だが、これまでの日本人の海外旅行のあり方を見事に表わしている。石川淑英氏(交通公社勤務)は、日本人の海外ツアーが大人数による画一的なものから、少数による多様な目的のものに変わってきていることを指摘した。そのなかには、主婦によるキムチの漬け方を勉強する韓国ツアーといったものもあったそうだ。また山口文恵氏(フリーランスライター)によると、今、六本木ではアメリカやヨーロッパに旅行してきたなどという馬鹿にされ、逆に、東南アジアのどここの市場や屋台がいいということを知っているのが最先端なのだそうだ。このようなスノッパな旅も含めて、日本人の東南アジアへの旅の内容は、多様化しているようにみえる。

PHD NEWS

PHDのトレーナーを買って下さい

今年のPHDオリジナルトレーナーは左胸のワンポイント。メッセージは“Living is sharing(生きるとは分かち合うこと)”。研修生の費用を生みだすためぜひお求め下さい。委託販売もお願いできれば幸いです。



サイズ: S・M・L
色: 白、黒、深緑、紺、赤
価格: 3,500円(送料別途)
おハガキ、お電話でPHD協会までご注文下さい。品物が到着しだい添付の振込用紙で代金をお支払い下さい。

会費・ご寄付 寄託状況

8月	120件	1,408,848円
9月	59件	730,803円
計	179件	2,139,651円

仮称「若手の寄合い」いよいよ始動

PHDに連なる有志が、アジアと日本・海外協力・国際問題などについて、日頃考

えていること、呼びかけたいこと、共に行動したいと考えていることをマジメにしかも楽しく話し合い、単なる知識の修得に終わることなく例えば農業に就く人、海外で活動する人、あるいは、様々な講演会や催物を行うなどといった行動が生まれることを願って会がスタートしました。10月10・11日と兵庫県南光町で合宿を行い学生、協力隊OB、有機農業の実践者、勤め人とユニークな面々が集まりどんな会にしていこうかを打合せ11月14日から定例会が始まり第一回はODA(政府開発援助)について学習をしました。今後月に1回のペースで行います。ぜひご参加下さい。日時についてはお問合せ下さい。

西日本スタディーツアーのお知らせ

'88年11月15日に神戸を出発し、約3週間の予定で九州、中国地方を訪問します。平和、健康、その他の社会問題に取り組んでいる方々をはじめ、多くの人々との交流を希望します。旅程は調整中ですが、決定すれば近隣の会員の方々にはご案内いたします。
●訪問予定地(変更もあり得ます)
福岡県: 福岡市・北九州市・春日市・田川郡
佐賀県: 佐賀市・西松浦郡
熊本県: 熊本市・水俣市
長崎県: 長崎市・諫早市
山口県: 下関市・宇布市

広島県：広島市・福山市
岡山県：岡山市・備前市

ホームステイのお願い

'88年1月末に第6期研修生がやって参りま

すが、家庭滞在にご協力して下さる方々を探しています。約1年間の日本滞在の間に、研修や交流などで兵庫県を中心に、県外へも出かけます。お近くに参ります際にご家族の一員としてお迎え下さい。第6期生は男性2名女性2名が確定しています。短期、

長期は問いません。また、研修先、交流先についてご近所、お知合いの方をご紹介下さい。詳細については、ご説明しますので協会までご一報下さい。



/編/集/後/記/

この号の企画・編集作業を始める前に、PHDレターの今後のあり方や編集方針などについて、多くの方の貴重な御意見をうかがう機会がありましたが、さしあたっては「現状維持」の路線を維持することになり

ました。しかし、これから先、レターの内容がマンネリ状態に陥らないようにするためにはどうすれば良いのか、これはなかなか頭の痛い問題です。このレターの発行にかかわる者としては、年4回お届けしているPHDレターが、本当に読まれているのかどうか、ひどく気になるものです。このレターの内容をより一層充実させ、一方通行の「押しつけがましい」ものとしなないためにも、読者の皆さん

のより積極的な御参加を望みます。

(R)

レター〈25号〉編集メンバー

赤松恵美子	坪光子	得原輝美	大森和夫
小澤裕之	小田博志	梶原靖子	川那辺裕子
佐々木久恵	芝美代子	袖岡信明	内藤香代子
本部隆一			(五十音順)

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため掲載しておりません。